

課題名	50 難防除病害虫の防除法の確立	分類	①
	イチゴ炭そ病防除のための親株の選定		
試験研究年次	1年(完了)		
<p>I 目的</p> <p>イチゴ炭そ病の伝染経路、特に圃場における第一次伝染源は明らかでない。そこで、親株からの伝染の有無を明らかにし、防除対策に資する。</p>			
<p>II 試験方法</p> <p>1 試験場所：福岡農総試験内露地ほ場</p> <p>2 耕種概要</p> <p>(1) 親株床：昭和63年11月16日、予め11月にクロビ・クリで土壤消毒した親株床（畝幅2m）に葉身または葉柄に病斑が認められた発病苗と病斑が認められなかった無発病苗（品種：女峰、とよのか）を定植（株間50cm、1条植）した。</p> <p>(2) 採苗：平成元年6月9日からマサ土、パーミキュライト、黒粒培土を2:1:1の割合で混合した用土をつめた黒色ポリポット（直径11.5cm）を親株床に配置し、発生したランナー（子苗）を受け、採苗した。</p> <p>(3) 育苗床：7月20日に鉢受け苗のランナーを切断し、63年11月にクロビ・クリ消毒した育苗床（畝幅1m）にポット苗を並べ（間隔11.5×20cm、5条）管理した。</p> <p>(4) 薬剤防除：親株床では平成元年5月29日、6月6日、13日、20日、27日及び7月4日の6回、育苗床では7月26日、8月4日及び16日の3回、合計9回、展着剤（特リ-10,000倍）を加用し、10a当たり300ℓを肩掛噴霧器で散布した。</p> <p>3 区制・面積：親株床：1区4m²（親株4株）、育苗床：1区18~72株</p> <p>4 調査方法：ランナーを切断し、育苗床へ子苗（ポット苗）を移した7月20日及び8月7日は葉身の円形黒色病斑、葉柄の病斑部折損及び株の萎ちょう、枯死について調査した。8月16日、23日、9月5日は株の萎ちょう、枯死のみを調査した。</p>			
<p>III 主要成果の概要</p> <p>1 イチゴ炭そ病は、本病に感染した親株が第一次伝染源となる。 すなわち、育苗末期に葉身あるいは葉柄に病斑が見られる株を親株として用いた場合は、低温により晩秋期~春期は病徴が消失するが、ランナー発生期以降には子苗に対して感染源となる。</p> <p>2 発病圃場からの親株の採取は避ける。やむを得ず採取する場合は、無病徴の株を選ぶ。</p>			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 親株の発病の有無と育苗期における子苗の発病

品 種	親株 の発 病	萎ちょう、枯死株率 (%)					
		7月20日	8月7日	8月16日	8月23日	9月5日	9月13日
女 峰	無病徴	0	0	0	0	0	0
	発 病	0	9.0	16.4	26.9	35.8	43.3
とよのか	無病徴	0	0	0	0	0	0
	発 病	0	0	5.6	5.6	16.7	16.7

注) 萎ちょう、枯死株率は萎ちょう株と枯死株(累計)を合わせて算出

第2表 親株床、育苗床の薬剤防除と子苗の発病(品種:女峰)

親株 の発 病	供試薬剤名	希釈 倍数 (倍)	葉身 発病 株率	葉柄 折損 株率	萎ちょう、枯死株率 (%)				
					7/20	8/7	8/16	8/23	9/5
無病徴	アトラコール水和剤	500	0%	0%	0	0	0	0	0
	無 散 布		0	0	0	0	0	0	0
発 病	アトラコール水和剤	500	0	0	0	0	1.7	6.7	6.7
	無 散 布		4.5	10.4	0	9.0	16.4	26.9	35.8

注) ① 萎ちょう、枯死株率は萎ちょう株と枯死株(累計)を合わせて算出

② 葉身及び葉柄の発病は8月7日に調査

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 県野菜病害虫防除基準に追記し、指導上の参考資料とする。
- 2 炭そ病の病斑は輪斑病との区別が困難であるので親株としての利用は高温期(8~9月)の発病、特に萎ちょう枯死株の発生の有無により判断する。
- 3 アトラコール水和剤は仮植期のみ登録である。

VI 今後の研究上の問題点

本県におけるイチゴ炭そ病菌の種類の解明

VII 資料名

平成元年度福岡県農業総合試験場生産環境研究所 野菜・花き病害虫関係試験成績概要書